

# 近世初期城下町の成立過程と町割計画図の意義

— 徳島藩洲本城下町の場合 —

平井松午

- I. はじめに
- II. 織豊期の洲本城下
  - (1) 淡路支配の変遷
  - (2) 脇坂治世期の洲本
- III. 「由良引け」と洲本城下町
  - (1) 徳島藩の淡路支配と「由良引け」
  - (2) 洲本城下町の空間構造
- IV. 侍屋敷配置計画図としての「須本御城下町屋敷之図」
- V. 町割変更図としての「須本御山下之絵図」
- VI. おわりに

## I. はじめに

城下絵図は城下町研究の基本資料であり、歴史地理学分野では城下町における空間構造の解明<sup>1)</sup>や武家の居住パターン分析<sup>2)</sup>などに利用され、城下絵図を活用した都市史研究<sup>3)</sup>も報告されている。ただし、絵図の利用に際しては史料批判という検証プロセスが必要となるし<sup>4)</sup>、城下絵図の資料的限界性を示唆する渡辺は、誤解のない空間像を絵図から導き出すためには、絵図作成目的に沿った形での分析が不可欠であることを説く<sup>5)</sup>。

数多く残る城下絵図については、正保元年(1644)の江戸幕府による城絵図の調進命令以降に作成されたものが圧倒的に多く、城下町建設に関わって作成された計画図は稀とされ

る<sup>6)</sup>。もちろん、正保城絵図以前の城下絵図としては、西日本の城下町に限っても池田光政治世期(1617~32年)の「因幡国鳥取城図」<sup>7)</sup>や堀尾時代(1620~33年)の松江城下図<sup>8)</sup>、寛永9年(1632)の「岡山古図」<sup>9)</sup>、寛永年間(1624~44)作成とされる「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」や「讃岐国高松城図」<sup>10)</sup>、慶長14年(1609)頃の佐賀城下図<sup>11)</sup>などが知られている<sup>12)</sup>。それらの絵図は基本的に侍氏名が記載された家臣屋敷の配置図であり、近世初頭における城下町成立期の町割プランを考察する上で貴重な絵図群といえるものの、城下町建設に直接関わる町割計画図そのものではない。強いてあげるならば、池田光政の国替えにより、屋敷割図の侍氏名の上に入れ替えとなる光政家臣名の付箋を貼り付けた寛永9年の岡山古図が、家臣配置計画図といえようか。ちなみに三浦は、慶長5年(1600)以前の城絵図は1枚もなく、聚楽第や肥前名護屋を描いた屏風絵だけに限られるとしている<sup>13)</sup>。その点で、城下絵図は近世の所産物でもある。

しかしながら、城の縄張りや城下町建設に際しては、当然ながらその設計図となるものが不可欠であるにもかかわらず、これまでそうした城下町計画図についてはほとんど報告されていない。矢守が指摘するように、そうした計画図自体が残ってこなかったことによるのかもしれないが、その理由は不詳である。

キーワード：近世初期城下町、城下絵図、町割計画図、由良引け、洲本

いずれにせよ、そうした城下町割計画図が残されていれば、城下町建設の経緯だけでなく、城下町成立期における都市プランの解明や、その後に作成された城下絵図との比較により城下町割プランの変容過程を検証できることになる。さらに、城下町建設地に織豊期もしくはそれ以前の城地が先行して占定されていた場合には、城下町割計画との関連性についても検証可能となろう。そこで本稿では、徳島藩政下における城下町構造の分析を進める中でその存在が確認された、淡路国洲本（須本）城下町の建設段階に作成されたとみられる2枚の町割計画図を紹介し、近世初期城下町の成立過程を明らかにすることで、こうした近世初頭における城下絵図・城下町プラン研究の欠落部分を補おうとするものである。

## II. 織豊期の洲本城下

### (1) 淡路支配の変遷

洲本の地名については、文安2年(1445)の「兵庫北関入船納帳」に「洲本」「スモト」「須本」とあるのが初出とされる<sup>14)</sup>。洲本城は、淡路島南東部の由良城を本拠としていた安宅氏によって16世紀前半に築城されたが<sup>15)</sup>、当時の洲本城は現市街地の南側にそびえる三熊山山上の山城（標高132.2m）とみられている。

大坂湾を挟んで畿内と対置する淡路島は、戦国期の西国大名にとって畿内進出の拠点となった。その詳細は割愛するが、天正9年(1581)の織田軍の侵攻により安宅氏は滅亡し、その後、織田勢と畿内進出を目論む長宗我部軍との抗争が続いたが、天正13年の羽柴秀吉による四国平定戦により淡路国は羽柴領となった。この間、天正10年に仙石権兵衛が洲本城主に任じられたが、同13年には仙石氏に代わって高取城主の脇坂安治が洲本城主となった。その際、淡路国は脇坂安治領の3万石、志知城の加藤左馬助（嘉明）領1万5千

石、羽柴家領1万8千石に分領された。文禄4年(1595)に加藤氏が伊予松前に転じた後、旧加藤領は豊臣家蔵入地となり、石川紀伊守が代官に任ぜられて三原川河口の叶堂城に拠点を置いた（図1）。

慶長14年(1609)9月には脇坂安治の伊予大洲への移封により、洲本城は津藩主の藤堂高虎にいったん預けられ、翌15年2月には姫路城主池田輝政に淡路一国が加封された。輝政は慶長18年由良浦対岸の成ヶ島成山（標高48.3m）に新城（由良成山城）を築くとともに、翌年には三男忠雄を国守とした。しかしながら、大阪の陣の功により、元和元年(1615)閏6月3日に池田家に代わって徳島藩主蜂須賀至鎮に淡路国7万石余が加増され、以後、明治維新までの約260年間、淡路国は徳島藩領として蜂須賀家の支配下に置かれた。蜂須賀家は当初、由良成山城に城番を置いて淡路支配の拠点としたが、寛永8(1631)



図1 淡路における織豊期～寛永期の古城分布  
Raster100000および数値地図（地図画像）  
25000「洲本」より作成。

～12年の「由良引け」により拠点を洲本に移転し、洲本城下町を整備した。本稿で紹介する2枚の町割計画図は、その際に作成されたとみられる城下町建設計画図である。

## (2) 脇坂治世期の洲本

既述のように、洲本城（三熊山山上の上ノ城）は安宅氏によって16世紀前半に築城され、脇坂安治も24年にわたって洲本城を拠点とした。当時の洲本城下の町並みを伝えるとされる絵図に、「天文年中淡路諏本町並図」（図2）と「城絵図」（図3）がある。

前者は嘉永6年（1853）写・明治24年（1891）

写の絵図<sup>16)</sup>で、別に同内容の「天文年中安宅隠岐守城下略図」<sup>17)</sup>もある。「御城山（三熊山）」の山城（上ノ城）は描かれず、山下に櫓・高石垣をめぐらす平城形式の「安宅撰津守 後河内守 御城」（下ノ城）が景観描写されるなど、信憑性を欠く江戸後期の考証図とみられるが、寛永8～12年の「由良引け」後に内町として整備される地区（須本）に「土屋敷」「町家」「町」「野」や「盗賊ヤシキ」、外町地区には「津田村」や田畠が記載されている。内町地区に常楽寺・本善寺・八幡宮・称名寺、外町地区に浄泉寺・西蓮寺・天満宮・辻堂がある。内題下には「天正年中脇坂



図2 「天文年中淡路諏本町並図」（部分）

洲本市立淡路文化史料館蔵。彩色図。上が南。



図3 須本「城絵図」

国文学研究資料館所蔵蜂須賀家文書，資料番号1220。彩色図（123×90cm）。上が南。

ノ時代須本 元和元年ヨリ洲本二改ム」と付記されている。

後者の「城絵図」<sup>18)</sup>は、脇坂安治治世期(1585～1609)の洲本城(上ノ城)ならびに洲本城下を描いた絵図とみられている。谷本<sup>19)</sup>と松岡<sup>20)</sup>はともに、のちの洲本城(下ノ城)に位置する三熊山山下の「中務屋敷」が脇坂安治の官職名「中務」を指し、山上の洲本城(上ノ城)の曲輪に脇坂家臣の侍屋敷があることから(図4)、本図を伊予大洲転出直前の慶長9年の城下町絵図と推定し、のちの内町地区には初期城下町に特有の「豎町」型プランを示す「町屋敷」と「侍屋敷」がみられるのに対して、外町地区は未整備な状況にあるとしている。西尾<sup>21)</sup>はさらに、天正20年(1592)の「脇坂安治感状」に「すもと中町」

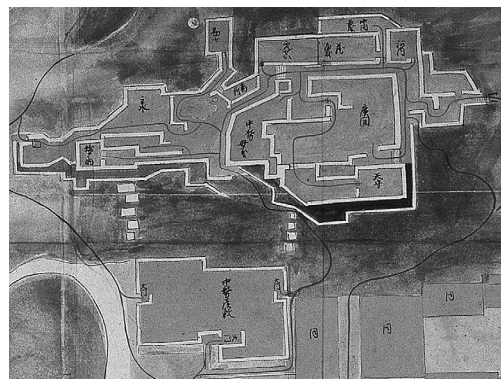


図4 須本「城絵図」にみる城郭・居館  
出典は図3と同じ。上が南。

の地名があることから、洲本にも織豊期城下町が存在したのではないかと推察している。

脇坂時代の洲本城下町に関しては、松本豊

寿がすでに、洲本城下町を描いた「天和三年江戸為御用相納旨」の下書きがある「淡路国洲本之御城絵画」（図5）において、三熊山山腹に「古ヤシキ」と記された7軒分の城屋敷があり、脇坂時代に機能していたと推定している<sup>22)</sup>。これに関しては先の西尾も、洲本城（上ノ城）山腹の小規模曲輪からなる「古屋敷」に言及している。西尾作成の洲本城縄張り図によれば、上ノ城と下ノ城を結ぶ東西2連の登り石垣周辺に古曲輪がそれぞれ2ヶ所・7ヶ所確認される。そのうち、西登り石垣周辺の古曲輪が、松本が指摘する7軒分の「古ヤシキ」に比定される。西尾は類例城の縄張りとの比較から、古屋敷群を天正期の脇坂家臣団屋敷<sup>23)</sup>に、登り石垣の築造時期を文禄・慶長期と推定している。その前提として西尾は、登り石垣を山下の脇坂居館（下ノ城）と山上の上ノ城とを結ぶ連絡路としている。

「城絵図」の作成時期は不詳であるが、後

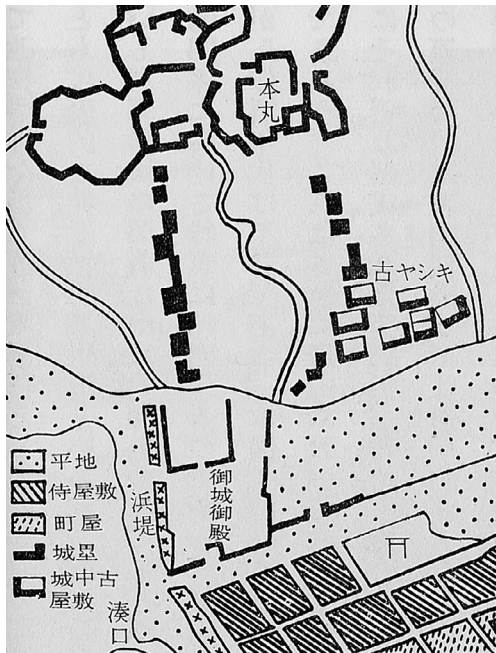


図5 「淡路国洲本之御城絵画」の略図  
松本豊寿『城下町の歴史地理学的研究 増補版』、  
吉川弘文館、1967、224頁。上が南。

述する徳島藩政初期の洲本城下絵図群と同じく、国文学研究資料館蔵の蜂須賀家文書に収蔵されていることから、考証図とみられる「天文年中淡路諏本町並図」のように、その記載内容を一概に疑問視できない面もある。ただし、次のような問題点も孕んでいる。

1) 仮に寛永8～12年の「由良引け」後の洲本城下町が「城絵図」に描かれた城下町を踏襲したとすると、多くの町屋敷を潰廃して（あるいは由良に移転した町屋敷の跡地を利用して）徳島藩士の侍屋敷を造営し、町割も大きく変更されたと考えられることや、2) 「中務屋敷」（下ノ城）の内枳形の向きが「城絵図」では右折れ虎口であるのに対して、後述する寛永期作成と推定される「須本御城下町屋敷之図」をはじめとする一連の洲本城下絵図では左折れの虎口と、「由良引け」前後で食い違うこと、3) 堅町・横町と大手筋の関係が不明瞭、4) 中務屋敷東方に慶安2年（1649）築造の須本大波戸とみられる「波戸」が描かれていること、5) のちに内町と外町とを界する堀川が実態とは異なり、寺（八幡宮）の背後から流れ出ていることなどである。それゆえ、「城絵図」についてはさらに詳細な検討を要するが<sup>24)</sup>、この点は本論の主題ではないので、その説明は今後待ちたい。

以上のように、「由良引け」以前の洲本の状況については詳らかではないが、池田氏によって由良成山城が築城された慶長18年（1613）から「由良引け」が開始される寛永8年までの約18年間は衰退したとみられるものの、それまでに安宅氏や脇坂氏らによって形成された根小屋的集落や町場の集落の形成はみられていた可能性はあり<sup>25)</sup>、のちの外町地区には津田村<sup>26)</sup>が存立していた。

### Ⅲ. 「由良引け」と洲本城下町

#### (1) 徳島藩の淡路支配と「由良引け」

徳島藩の初代藩主となる蜂須賀至鎮は淡路国の加封後、元和元年（1615）7月28日に牛

田一長入道宗樹を由良城番とし、岩田七左衛門と篠山加兵衛を補佐役として淡路支配を命じている。元和5年に牛田が没すると、脇城番で蜂須賀家の筆頭家老稲田植元が由良城番を仰せ付けられ、植元の子示植が由良へ移っている。しかし、同7年に示植は免職となり脇城に帰還した。その後、寛永2年(1625)に森甚太夫が由良城番に就いたが、寛永8年6月27日には稲田修理亮示植が由良城代を命ぜられて「淡州へ引越」すことになる<sup>27)</sup>。

徳島藩が当初淡路支配の本拠地とした由良成山城は、寛永4年の隠密偵察書によると「海へさし出候小山也、町の家二三百も御座候…(中略)…侍五六十人居候」<sup>28)</sup>とあるが、寛永7年に蜂須賀蓬庵(至鎮の父で藩祖)が公儀(将軍)に宛てた書状には、「住宅之上下屋敷無之事、…(中略)…片端にて候故、商売之道勝手悪、町人被迷惑由申候つる、付在郷之百姓ハ由良へ程遠、於出入難成迷惑候由」<sup>29)</sup>と、その立地条件の悪さを訴えている。また成山城についても塀矢蔵ことごとく落ち、大手門さえ開閉できないまでに破損し、「屋敷之内へ浪うちこむ躰」<sup>30)</sup>と、軍事・住居施設として機能していなかった様子が伺える。

その結果、砂嘴で囲まれ天然の湊を有したものの、淡路南東端に位置する由良は平地に乏しいことから、蜂須賀家は寛永7年に洲本への移転を幕府に願い出て許可され<sup>31)</sup>、翌8年から12年にかけて「由良引け」を行っている。「由良引け」を主導したのは二代藩主忠英側近の家老長谷川伊豆守(のち越前守)とみられ、これにより洲本には近世城下町が整備され、淡路における政治経済の中心地として発展することになる。当時はすでに元和元年に一国一城令が幕府より出されていたが、外様大名でも広島藩浅野氏の三原城、鳥取藩池田氏の米子城のように支城建設を認められたケースもある<sup>32)</sup>。

「由良引け」の経緯を、蜂須賀家の正史で

ある『阿淡年表秘録』<sup>33)</sup>によると、次のようになる。

寛永8年6月27日に脇城番の稲田修理亮(示植)が家来とともに「淡州へ引越被仰付」、翌年3月13日には加須屋与右エ門が「淡州御代官役被仰付」られている。寛永11年5月6日には稲田示植が「淡州由良御城破却」の命を受け<sup>34)</sup>、関九郎左エ門・平瀬所兵衛・滝四郎兵衛の3名が「由良御城破却二付御奉行被仰付」られ、このときにそれまで「淡州政事方」であった岩田七左エ門は役を免じられて隠居している。翌寛永12年12月15日には、家老長谷川越前守に「淡州須本へ罷越普請絵図申付候様被仰付」られ、翌13年5月20日に長谷川越前守は「須本絵図御用二付絵師召連須本江罷越」し、同年夏に「將軍家依仰須本絵図御指上」ている。この「須本絵図」の幕府提出をもって、形式上は幕府が許可した「由良引け」の完了報告とみられるが、後述するように、この「須本絵図」が本稿で取り上げる洲本城下建設計画図の1枚である可能性がある。

なお、三熊山山下の洲本城(下ノ城)は、寛永7年の文書では「御番所」と記され、寛政4年(1792)には城内の「須本御屋敷」については以後「御城地御殿」と唱えること、さらに寛政12年(1800)以降は「御城」と称するようになったとされる<sup>35)</sup>。しかしながら、蜂須賀家は徳島本城に居住したため洲本城の城主は不在であり、そのため「須本御屋敷」は政庁的な施設ではなく、藩主による淡路巡見時の宿所などに利用された。

このような経緯の下に行われた「由良引け」の政治的背景について三好<sup>36)</sup>は、稲田・牛田といった徳島藩の城番家老による分権的支配体制(城番制)<sup>37)</sup>を解体し、藩主直仕置体制の確立を目指した家老長谷川越前守らの政治志向があるとしている。それゆえ、洲本城代として洲本に入部した稲田修理亮示植の役割は、洲本城の管理と淡路の軍制を統

轄するだけの番役に限られたとする<sup>38)</sup>。稲田家には寛文8年(1668)になって初めて洲本仕置職が与えられることになるが、その後も淡路全般の政事方および洲本城下の支配は本藩から洲本に派遣された仕置もしくは城代が、稲田家と合議してこれを勤めることになる。その点で、淡路国および洲本城下町は藩政期を通じて徳島藩による洲本仕置支配体制下に置かれ、洲本もそうした支配体制を反映した城下町構造を呈することになるが、この点については別に稿を改めて論じることしたい。

なお、洲本城下町建設にあたって、真っ先に由良城下から洲本に移動させられたのは鉄砲組(足軽隊)で、外町の鉄砲屋敷から建設を開始したとされるが<sup>39)</sup>、その場合には、「由良引け」当初にすでに城下町の縄張りがおおた出来上がっていないなければならない。これに続いて、寺院、武家屋敷、町人屋敷も、そのほとんどが由良から移転したとされるが、その実態は不明であり、このような移

転プロセスについては、後述する城下町割計画図の分析からもう少し詳しく検討を加えてみることにしたい。

## (2) 洲本城下町の空間構造

「由良引け」時における洲本城下町の成立過程をみる前に、ここでは洲本における近世城下町の構造について触れておきたい。

洲本城下町に関する城下絵図についてはこれまでに、民間図を含めて28点を確認できたが、ここで洲本城下町の空間構造をみるために参考とした絵図は、「淡路御山下絵図」<sup>40)</sup>(以下、①図)と「須本御城下町屋敷之図」<sup>41)</sup>(以下、②図)である。

前者の①図(図6)は、「侍屋敷」「町屋」「足軽町」「寺町」に土地利用区分された城下絵図で、天守の表記、山城石垣・湊の注記、道の色分け、主街道の朱筋などは、正保3年(1646)に幕府に提出された城絵図「阿波国徳島之図」と記載が類似していることや、慶安2年(1649)に造営された大波戸がまだ描



図6 ①図「淡路御山下絵図」

国文学研究資料館所蔵蜂須賀家文書、資料番号1230-1。彩色図(184×233cm)。上が北。

かれていないことから、正保城絵図とほぼ同時期に作成された可能性、すなわち幕府に提出された正保城絵図の控図である可能性が高い城下絵図である。平城の洲本城（下ノ城）には三層の天守が描かれているが、これは実態とは異なる。

後者の②図は、城下の侍屋敷区画割こそ図示されていないが、侍氏名（徳島藩士ならびに稲田家家臣）や寺社名、諸施設名が記載されているほか、町屋や「御鉄砲之者」の足軽組屋敷が組頭単位で色分けされた美しい彩色絵図で、図7はそのトレース図である<sup>42)</sup>。本図については、記載された徳島藩士名を『徳島藩士譜』<sup>43)</sup>から、表記年代が享保16年（1731）1～4月と特定できる。本図には大波戸のほか、元禄8年（1695）に整備された内

湊も確認できる。大波戸付近には「（洲本）御船屋」がみえるが、これは同年中に洲本川（当時は塩屋川あるいは物部川と称す）対岸の塩屋村に移転しており、本図はその直前の様子を示しているとみられる。②図は、後述の寛永期作成とみられる「須本御城下町屋敷之図」以後、初めて作成された城下屋敷割絵図（侍配置図）であり、近世中期の洲本城下町の様子をよく示している。

正保期の①図と享保期の②図とを比較すると、この間に整備された大波戸や洲本内湊のほか、内湊付近に新たに町屋・集落部分が拡大し、三熊山山下に沿う侍屋敷地（稲田家家臣屋敷）の道筋が一部異なるものの、洲本城下町の道筋・町割に大きな変化はない。洲本城下町は内町と外町とから構成され、この点

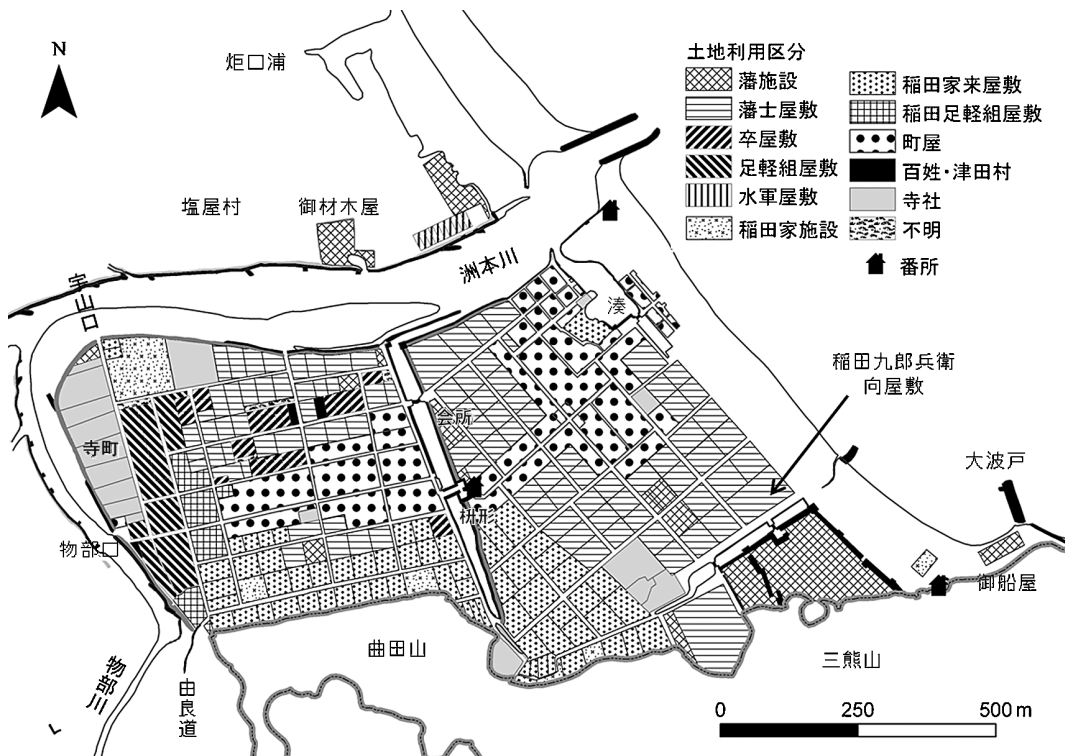


図7 享保16年（1731）頃の洲本城下の町割・土地利用

②図「須本御城下町屋敷之図」（国文学研究資料館所蔵蜂須賀家文書、資料番号1217-3）による。ただし、本図では町割や屋敷位置に侍氏名は記載されているものの、屋敷区画割は図示されていないため、屋敷区画割は明治2～3年（1869～70）頃作成とみられる実測分間図「洲本御山下画図」（徳島大学附属図書館蔵、資料番号 徳48）を参考にArcGIS9.2で作図。



で、洲本城下町は徳島と同様に「内町外町」型の城下町を呈するが<sup>44)</sup>、②図によると内町の街区が真北に対して約40～42度西に偏るのに対し、外町街区は西に約10～15度振れ、内町の道筋と連続する外町の道筋は外町堀端の境に食い違うように区画されている。また、内町の街区にはT字路や鉤形路をとるものもある。

②図(図7)によれば、内町には洲本城(御屋敷)、徳島藩士や稲田家家臣の侍屋敷、町屋のほかに、銀札場、新御蔵、会所、籠屋(牢屋)、町年寄(詰所)など、淡路および洲本支配に関わる施設・機関が置かれていた。とくに、会所丁一带には、会所や町奉行所、鍛冶蔵、作事方役所が置かれ、徳島藩による淡路経営の中核部をなした。これに対して外町では、西端の物部川沿いに寺町が形成され、その内部を下級藩士や稲田家家臣の侍屋敷、鉄砲之者(足軽町)、同心屋敷、手代屋敷、町屋、瓦取場などのほか、「百姓」で充填されていた。内町と外町とは「堀幅拾四間」の兩岸を石垣や土手で囲まれた堀で分断され、内町側には警護のための枡形虎口が設けられている。

大手筋は、洲本城(御屋敷)の木橋(一部が土橋)を出て左に折れた後に、「稲田九郎兵衛部屋住屋敷(向屋敷)」をすぐ右に曲がり、内町町屋のT字路で左に折れて枡形に向かう。その点で、先述した「城絵図」ではタテ町型を示していた町割は、近世城下町に多いヨコ町型を呈する。枡形虎口の土橋を抜けて外町堀端で筋違いになってそのまま西に直進した大手筋は、外町虎口の手前で西に向かう福良道(物部口)と北に向かう岩屋道(宇山口)の二手に分かれる。①図・②図とも、内町北端の洲本川右岸および内町外町の境をなす堀部分は土手もしくは石垣が施されているが、大坂湾に面する東側には総郭施設は設けられていない。また、①図では外町の周囲は松並木が続く土手で圍繞されているが、②

図ではその一部に石垣が施され、内町外町の境をなす堀の石垣は洲本川中に迫り出し、洲本川の北岸(左岸)も石垣で固定されている。

②図の特徴は、稲田家家臣(蜂須賀家陪臣)の侍屋敷氏名についても記載があることで、これによれば稲田家の家臣屋敷地は、三熊山および西方に連なる曲田山山下北麓沿いに内町から外町まで東西方向に伸びており、洲本城下町建設にあたって稲田家家臣屋敷が徳島藩士屋敷と棲み分けられて計画的に配置されたことを物語る。ただし、①図では稲田家家臣屋敷もすべて徳島藩士屋敷と同様に「侍屋敷」と表記されている<sup>45)</sup>。もともと脇城番であった稲田家は大名格(14,350石余)の蜂須賀家筆頭家老で、天正13年(1585)の阿波国入部後は「阿波九城」の一つであった美馬郡脇町の脇城を拠点とし、脇町に隣接する猪尻村を中心に多くの家臣団を擁していた。寛永8年に稲田示植が由良(のち洲本)城代に任じられて淡路に移住してきた際には、200～250名の家臣を伴ったとされる<sup>46)</sup>。淡路移転にともない、移転手当として稲田家に米1000石と銀100貫目等、家臣にも禄高に応じて合計283石と屋敷が与えられ、翌9年9月には美馬郡の知行4,740石余の淡路分替え地として、5,346石余と浦加子74軒が稲田家に与えられている。

洲本城下町のもう一つの特徴は、他の洲本城下絵図にも「御年貢地」あるいは「御年貢地建家」等と記載される津田村御年貢地が、幕末まで外町の一部に残っていたことであろう。この点は、徳島城下町とも共通する特徴である<sup>47)</sup>。

このように、内町・外町からなり、山川や石垣・土手といった防御施設で圍繞され、内部にも寺町・足軽町やT字路・遠見遮断といった近世城下町特有の町割をもつ洲本城下町は、「由良引け」終了後の「寛永一五年頃には略々城下町の格好がついて来た」<sup>48)</sup>とみられている<sup>49)</sup>。

#### IV. 侍屋敷配置計画図としての「須本御城下町屋敷之図」

以下で分析対象とするのは、「須本御城下町屋敷之図」<sup>50)</sup> (以下, A図) と「須本御山下之絵図」<sup>51)</sup> (以下, B図) で、いずれも「由良引け」に関わって作成された城下町建設計画図とみられる城下絵図である。

A図(図8)は墨・藍・朱3色で描かれた下図仕立ての城下絵図で、城下部分のみの平面図であり、絵図面裏書きに「弐枚之内／淡路国絵図 下書き」と記されている<sup>52)</sup>。図上計測で、1間＝6尺5寸とすると620～720分の1前後、1間＝6尺で計算すると580～660分の1前後の数値が得られることから、本図は一分一間図として作図された可能性が高い。

特徴としては、1) 屋敷割区画内の付紙に屋敷の表口・裏行の間数と侍(徳島藩士)氏名、2) 道筋には「拾間道」、「五間道」、「四間道」、「三間道」といった道幅が記載され、3) 藍色で着色された総構え施設にも「いしかき」「とて」「ほり」と記した付箋が貼られている。矢守<sup>53)</sup>によれば、大半の城下絵図は平面図を主としながらも、部分的に鳥瞰図あるいは景観図が用いられているとするが、その点で、本図は山下部分の「純正な平面図」といえる。

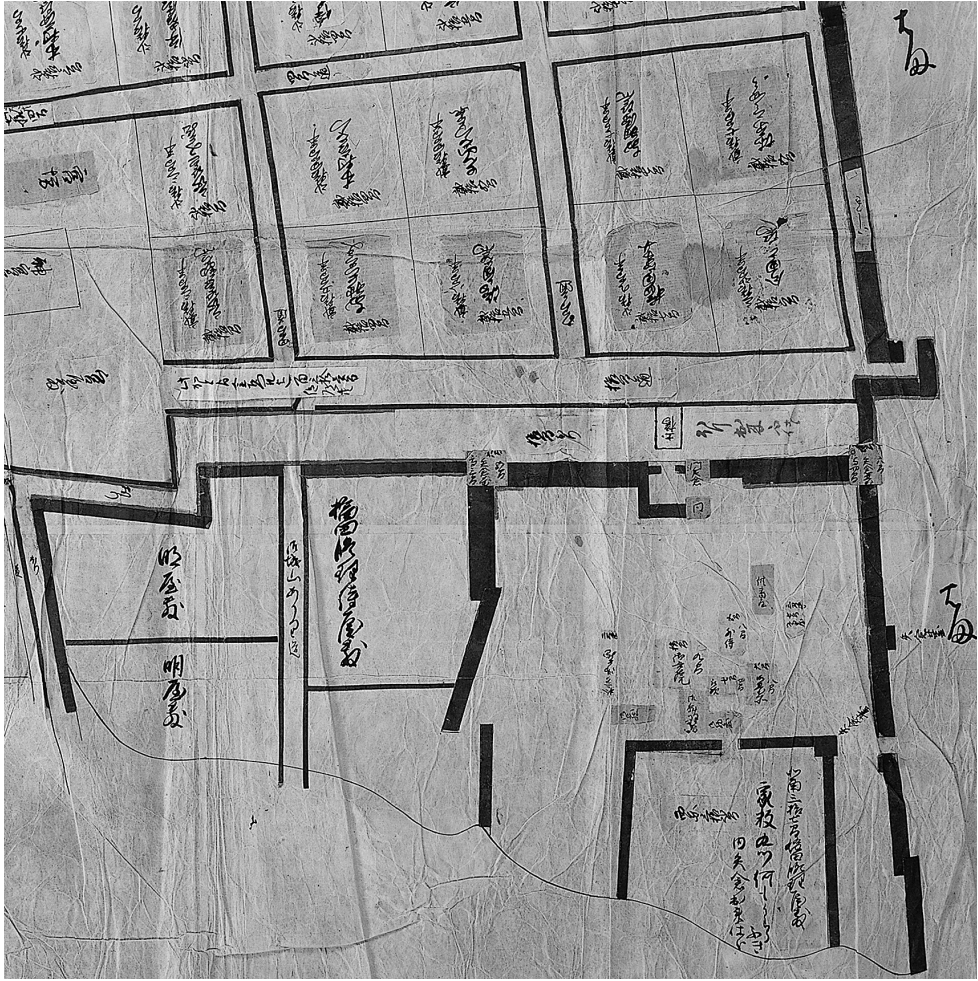
道幅は、御城前の外堀沿いの大手筋が10間、内町の手筋にあたる「御門筋」が5間、内町のほかの道筋が4間であるのに対して、外町は中堀に沿った南北方向の道筋だけが5間幅で、大手筋の道幅は4間、その他の道幅は3間となっている。中堀の枡形部分には「御門矢倉」が記載され、内町と外町とを結ぶ「どはし」の付紙がある。

洲本城の城郭内部は石垣で二重に画され、その内郭には「家数九ツ何もかわらふき／内矢倉出来仕候」と墨書されているほか、「北南三拾七間稲田修理屋敷」「西東三拾弐間」と付紙されている(図8-a)。洲本城代であ

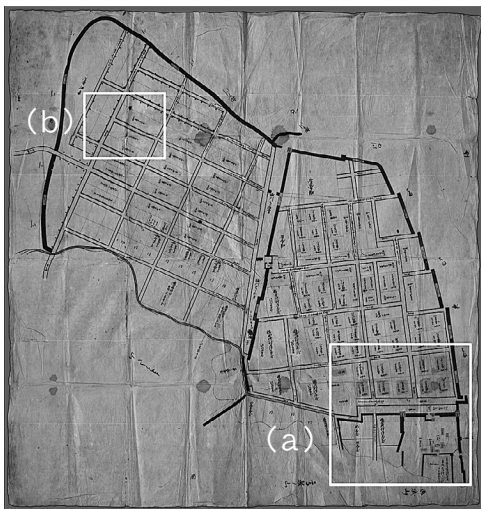
る稲田修理亮(示植)の屋敷は、実際には御城内外堀のすぐ北側、すなわち本図の「稲田采女」および「今田六左衛門」の2区画分の屋敷地に設けられることになるが(図7)、このA図によれば当初は城内の郭内に稲田屋敷、その西側に「稲田修理侍屋敷」が計画されていたことになる。結局、稲田修理亮(示植)屋敷が変更されたため、最終的に「稲田采女」屋敷は本図に示された御城内西側の「明屋敷」に、「今田六左衛門」屋敷はもう一区画西側の街区北東角の屋敷地に落ち着くことになる。

城内の内郭外には、「御書院」「御台所」「御馬屋」「供番屋」「外侍」「取次」「御料理間」「御物置」「御蔵」と付属建物名が書かれた紙片10枚が貼られている。さらに城内外郭の大手門虎口を挟む形で2つの「門矢倉」、さらに北東角および北西角の「いしがき」の上に高さ4間と3間の「矢倉台」の付紙が貼付されている<sup>54)</sup>(図8-a)。城内に入るには外堀の「土橋」を渡ることになるが、その外堀となる「拾間ほり」には「ほり出来不仕候」と朱書きで注記されている。言うまでもなく、城内各施設の付紙ならびにこの「拾間ほり」に関する記述は、A図作成時には、これらの施設が計画段階か、あるいはまだ仕上がっていないことを示している<sup>55)</sup>。

さらに、本図が「由良引け」時の洲本城下建設計画図とみられる大きな理由は、大阪湾に向かって城下町東側に「いしかき」と書かれた付紙の存在である(図8-a)。両側線を茶色、中を藍色で着色された石垣は、城内から北側の洲本川右岸に向けて階段状に4段にわけて築造されることになっているが、前述したように、城下町東側には今日に至るまでこのような総郭施設は設けられることはなかった。大波戸が建設される慶安2年(1649)以前の作とみられる「淡路国須本之御城絵図」<sup>56)</sup>(以下, ③図)には、この東側の石垣部分に細長い懸紙が貼り付けられ、そ



拡大図 (a)



拡大図 (b)

図8 「須本御城下町屋敷之図」とその拡大図 (a)・(b)

国文学研究資料館所蔵蜂須賀家文書，資料番号1217-4。(187×181cm)。いずれも上が北。

こには「此柿筋の紙ハ浜辺波よけ腰石垣二直し仕度所」と小書きされていることから、おそらくは洲本城下町建設当時から城下東側に石垣を設けることを幕府に願い出ているものの、結果的に幕府の許可は下りなかったとみられる。徳島藩の願い出理由の通り、仮にその理由が波避けにあったとしても、大坂湾、すなわち畿内に望む洲本城下町の防御性を高めることを、幕府が望まなかったとみるのは考えすぎだろうか。

A 図中に付紙で記された徳島藩士名49件を先の『徳島藩士譜』で確認したところ、寛永8年相続の「猪子太左衛門」と寛永10年没の「位田加右衛門」を確認できたことから、本図に記載された徳島藩士名は由良引け時の寛永8～10年のものと推定される。侍屋敷の付紙にはすべて、屋敷地の表口と裏行の間数が記載されている。城内の「稲田修理屋敷」表口32間×裏行37間、1,184坪を除けば、最も広い屋敷地は「今田六郎左衛門」で表口26間×裏行32.5間、845坪となる。洲本仕置を勤めた「稲田采女」屋敷地は表口27間×裏行29.5間、796.5坪である。外町に位置する最も狭い「磯村分右衛門」屋敷地は、表口・裏行とも15間で225坪であった<sup>57)</sup>。

これら49名の徳島藩士の中で、洲本以前の居住地が判明する者は13名で、うち「由良浦住」とする者6名、「由良浦屋敷預」1名、「由良浦屋敷御番」1名、「洲本住」3名、「津名郡郡家浦住」1名、「福良浦御預」1名を数えた。「由良引け」以前の由良居住者は8名で、洲本居住者も3名を数えた。郡家浦・福良浦は、のちにも徳島藩士勤番所である「御屋敷」や川口番所が置かれた要地である。

この他に、本図には間口・裏行の間数を示した街区ごとに、「町屋敷」や「町屋」、「下代屋敷」、それに「百姓町」の付紙が貼付されている。「下代」とは、無足の軽輩武士を指す。注目すべきは、内町の「町屋敷」に対

し、外町は「町屋」と表記されていることである。一般に、内町には譜代（特権）商人、外町には在地商人が集められることが多かったが、洲本においても城下町徳島と同様な地域制が採られたとすると、侍屋敷地区と同様に町屋地区も身分制にもとづいて区分されていたことになる。また、「百姓町」は外町に7街区を数える。一部がその後も御年貢地・御年貢地建家として残るものの、これらの地区の大半はのちに下級侍屋敷や足軽屋敷に割り当てられている。当初計画以上に下級侍・鉄砲組（足軽）が集住したことにより、「百姓町」として予定していた街区も、区画割を変更して足軽町に宛てることになったものと受け取れる。ちなみに、本図では外町の街区は、基本的には20間（一部19間で町屋部分は15間）×60間が2行から構成される短冊型ブロックを呈している。

他方、内町地区には「稲田修理侍屋敷」と直書きされた街区が5ヶ所あり、いずれにも「此内四屋敷」「此内三屋敷」と記載された付箋が貼付され、都合15区画を数える。その他、三熊山山下にも「稲田修理侍屋敷内」「同」と描き込まれた屋敷地が4区画ある。「稲田修理侍屋敷内」「同」と描き込まれた屋敷地は外町にも9ヶ所を数えるほか、曲田山山下には、「稲田侍屋敷」との下書きの上に「稲田修理内 蔵之者鉄砲之者小者」および「稲田修理内 鉄砲之者蔵之者小者」とそれぞれ表記された付紙が貼り付けられている。しかしながら、享保16年の②図では、稲田家の足軽組屋敷（「稲田九郎兵衛預り御鉄砲之者」）は外町町屋の西端に大手筋を挟んで配置されていることから（図7）、本図の表記位置と異なることが読み取れる。外町の西端には「寺町屋敷」と直書きされたブロックがあり、「由良引け」にともない10ヶ寺が配置された<sup>58)</sup>。

また、本図外町の西端と北端には、両側もしくは片側に10間間隔で傍点が打たれた道筋

がある(図8-b)。この部分の道筋については、一部ののちの絵図の形状(現状)とも異なっていることから、本図が描かれた段階では確定しておらず、まさに計画段階であったことを示すと解釈できる。同様に、内町部分でも、洲本(物部)川沿いの北端部の道筋・街区はのちの形状とやや異なる。

以上のことから、A図「須本御城下町屋敷之図」については、記載の侍氏名から寛永8~10年の間に作成された「由良引け」前半期の拝領屋敷配置計画図であると推察される。内町地区については、稲田屋敷の位置や海側の石垣、一部の街区・道筋にその後の計画変更が認められるものの、大半の街区・道筋や徳島藩士・稲田家家臣の屋敷割はその後も大きな変更がないことから、建設計画がほぼ固まった状況とみてとれる。これに対して、外町地区については道筋・街区の形状や屋敷地の配置はその後大きく変更されることから、未だプラン段階であることが読み取れる。外町となる津田村地内には、もともと池や沼、低湿地が広がっていたとされ<sup>59)</sup>、そうした池沼の埋め立てに時間を要したであろうことも、外町の整備の遅れや計画の変更につながったものと考えられる。

## V. 町割変更図としての「須本御山下之絵図」

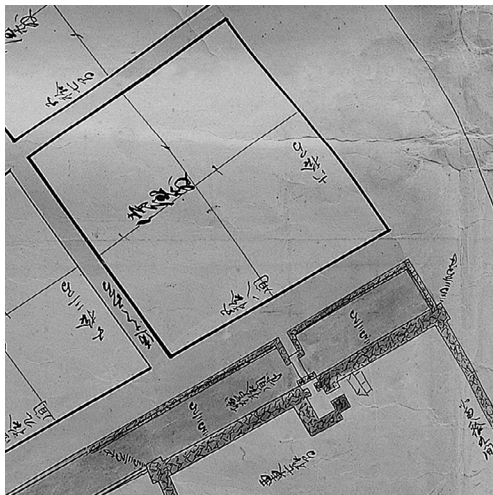
「由良引け」時の洲本城下町建設に関わるとみられる絵図がもう1点ある。「須本御山下之絵図」(以下、B図)である。B図(図9)では城下南側の三熊山が緑豊かに景観描写され、その山上には旧洲本城(上ノ城)の石垣の縦・横・高さについての間数が克明に記載されている。山麓の洲本城(下ノ城)の城内には、のちの追記とみられる天守風の3層の館と付属施設が描かれている。

本図の特徴は、城下の道筋で区切られた街区ごとに「侍屋敷」「足軽町」「下屋敷」「町屋」「寺」「蔵屋敷」と土地利用別に表記され、侍屋敷の街区にはさらに朱線で屋敷割区

画が記入されている点である(図9-a)。外町には「津田村 農人町」「農人町」と記載された街区が5ヶ所を数え、その周辺には田嶋景観が下書きされ、その上に線引きによって「侍屋敷」あるいは「寺」と墨書で追記された区画が6ヶ所を数える(図9-b)。また、本図中では「下屋敷」と表記され、実際には稲田家家臣(蜂須賀家陪臣)の屋敷地となるはずの街区・屋敷割に、徳島藩士向けの「侍屋敷」も配置計画されている。

先の寛永8~10年頃作成とみられるA図に比して、この「須本御山下之絵図」の方が後年の作とみられる点がいくつかある。1) 本図には内町東側(海側)の石垣が描かれておらず、先のA図では「明屋敷」となっていた個所についても「侍屋敷」(すなわち「稲田采女」屋敷)と明記されている。2) A図では、御城内外堀の「拾間ほり」について「ほり出来不仕候」の付紙が貼付されていたが、本図には「堀幅拾間半」の水堀が描かれている<sup>60)</sup>(図9-a)。3) 同様に、内町と外町とを分ける中堀も完成している。4) 内町の侍屋敷・町屋の町割はA図をほぼ踏襲しており、A図作成後に拡張されたとみられる洲本川沿いの道筋・町割(農人町・下大工町付近)も描かれている。5) 外町の大手筋が「道は、五間」(A図では4間)と表記されている。6) 外町の西端「寺町 拾ヶ寺」の東側に「足軽町」の街区が南北方向に連続して並んでいるが、その街区形態はA図にみられる大手筋と並行する短冊型ブロックではなく、大手筋に直交する短冊型ブロックを呈しており、この配置形態はその後における足軽町の町割を反映している(図7)。7) 外町中央部(本町6丁目と7丁目の間の南西角)に図示された「寺」は、寛永11年(1634)に由良浦から移転してきた浄泉寺とみられること<sup>61)</sup>、である。

ただし、外町地区に関しては、1) その後の絵図に描かれる(実際の)道筋の一部(図



拡大図 (a)



拡大図 (b)

図9 「須本御山下之絵図」(城下部分)とその拡大図 (a)・(b)

国文学研究資料館所蔵蜂須賀家文書，資料番号1229-1。彩色図 (228×224cm)。いずれも上が北。

7) がまだ描かれていないことや、2) 田畠の景観描写の上に「侍屋敷」や「寺」の区画割が重ねて線引きされるなど、外町についてはまだ町割整備が継続している様子を示している。ちなみに、慶安2年(1649)に整備される大波戸はまだ描かれていない。

こうしたことから、本図はA図作成後に「由良引け」の当初計画を変更せざるを得ない事態、すなわち寛永11年5月の由良城破却

命令後に作成された可能性が高いが、残念ながら作成年代を特定できるまでには至っていない。しかしながら、既述のとおり、寛永12年(1635)12月15日に藩主蜂須賀忠英は家老長谷川越前守に洲本城下の普請絵図調整を命じ、越前守は翌13年5月20日に「須本絵図御用」として絵師を召し連れて洲本に赴いている。そうした経緯を踏まえてこのB図「須本御山下之絵図」をみたとき、三熊山樹木表現

の深緑に高級な岩絵具が用いられるなど絵図仕立てが美しく、幕府の求めに応じて山上・山下の両洲本城ともに石垣の間数が克明に記載される一方、町割区分は地目別表記となっている点など、「將軍家依仰須本絵図」という史実に符号する要素がこの城下絵図にはいくつも認められる。そして、「由良引け」後も継続的に城下町整備が進められたであろうことを考え合わせると、本図において外町地区の内部がまだ侍屋敷や町屋で充填されていない状況も、時期的には合致する。

そうしたことから、本図については、寛永11年5月以降に描かれた洲本城下建設の最終段階を示す城下計画図とみられるとともに、「由良引け」完了報告を意味する寛永13年作成の幕府提出用「須本御普請絵図」の控図である可能性も考えられるのである。

A図によれば、町割がほぼ確定していたのは、御城内、内町の侍屋敷・町屋ならびに外町の寺町であった。城下町建設の常套として、最初に城郭部分の縄張り・普請が実施されたものとみられる<sup>62)</sup>。『洲本市史』では、洲本城下町建設の任にあたった足軽町から整備されたように説明されているが<sup>63)</sup>、A図を見る限り、寛永8～10年段階では足軽組屋敷の空間配置は確定しておらず、B図が作成されたと推定される寛永11～13年の間に確定に至ったものといえる。城下町建設にあたっては百姓や足軽衆がその中心的な役割を担ったかもしれないが、彼らの屋敷地は後年になって整備されたとみられるのである。

それゆえ、A図・B図に関するここまでの考察結果に依拠すれば、「由良引け」による洲本移転については、次のような段階的なプロセスが考えられる。

- 1) まず、A図の基図となる町割プラン図が作成され、そのプラン図にもとづいて寛永8～10年の内町地区の造営がほぼ終了した時点で、徳島藩士に対する拝領屋敷の配置計画を付紙で示したものがA図とみられ

る。なお、A図については、その配置計画時点で付箋を貼付された町割プラン図そのものである可能性もある。

- 2) ただし、実際の屋敷割にあたっては、稲田修理亮屋敷の変更など、一部修正が加えられて移転が実施されたとみられる。
- 3) その後、寛永11年5月の由良城破却命令が契機となり、とくに外町地区の町割プランが見直されて、寺町の東側に並行して足軽町が配置計画された。
- 4) 美しい絵図仕立てのB図は、こうした町割プランの変更を受けて寛永11年5月以降に作図されたとみられるとともに、「由良引け」の完了報告を意味する寛永13年幕府提出の御普請絵図（須本絵図）の控図である可能性がある。
- 5) さらに、このB図への「侍屋敷」の追記は、B図作成後における洲本城下へのさらなる家臣団の流入を示唆すると考えられる。その契機となったのが、島原の乱を受けて寛永15年3月に実施された由良成山城の破却とみられる。これにより、それまでの由良城詰めの侍は徳島および洲本の城下に移動したとされる<sup>64)</sup>。
- 6) 外町内部に残されていた津田村田畠のうち、大手筋に面した田畠や追記の「侍屋敷」は、結果的には当初の計画（A図）通り「町屋」となるが、「築屋敷丁」と呼ばれることになる洲本川沿いの田畠や蔵屋敷の一角は、徳島藩士屋敷や稲田家家臣屋敷（割長屋）、寺地に土地利用変更されている。
- 7) この結果、外町における津田村御年貢地は大幅に縮小し、寛永後期～正保期にはおおむね家屋で充填された洲本城下町が成立したと考えられる。

## VI. おわりに

本稿では、寛永8(1631)～12年の「由良引け」に関わって作成されたとみられる2枚の

洲本城下絵図を検証するとともに、その前後期における時系列的な連続性を踏まえて、洲本城下町の成立過程について検討を加えてきた。結果は、次のように要約されよう。

- 1) 「由良引け」にあたって外様大名の蜂須賀家（徳島藩）は幕府と密に協議し、その許可の下に城下建設を進めるとともに、幕府の求めに応じて御普請絵図を提出している。
- 2) 洲本城下町建設に関わる計画図として、「須本御城下町屋敷之図」（A図）と「須本御山下之絵図」（B図）の2枚の絵図が確認でき、B図にはA図にみられる町割プランの変更が認められる。
- 3) 「須本御城下町屋敷之図」は「由良引け」第一段階の寛永8～10年、「須本御山下之絵図」は寛永11年5月の由良成山城破却後に計画変更を受けて作成されたとみられる絵図面で、寛永13年に幕府に提出された「須本御普請絵図」の控図の可能性もある。
- 4) 「須本御山下之絵図」では、外町地区における町割プランの一部がまだ未整備ではあるが、寛永11年および同15年の由良成山城の破却にともなう家臣団の洲本移転により、その内部が充填され、職制や身分にともなう空間配置が確定したものと考えられる。そして、寛永後期～正保期には洲本は近世城下町としての様相をほぼ整えたものと思われる。
- 5) 洲本城下町の建設にあたっては、脇坂時代の脇坂居館（下ノ城）やのちに内町となる「須本」部分については再整備された可能性はあるが、絵図史料上の連続性には疑問点も多く、今後の検討を待ちたい。

城郭部分の詳細な注記を求めた正保城絵図（洲本の場合には③図「須本御山上絵図」がこれに相当）は、島原の乱後、軍事的目的<sup>65)</sup>のために、国絵図と合わせて幕府が提出を求

めた絵図である。現在のところ、正保以前に作成された絵図の多くは屋敷割や侍氏名が記載されていて、侍屋敷の配分を目的に藩用図として作成・使用された可能性が高い。本稿で紹介したA図「須本御城下町屋敷之図」もそうした絵図の一枚に分類できる。

これに対して、「須本御普請絵図」の控図ともみられるB図「須本御山下之絵図」については、正保城絵図に求められた本道・脇道の朱筋や交通注記を欠くものの、絵図仕立てはほぼ正保城絵図の要件を満たしている。実際、侍屋敷の区画割や外町における未整備地の表現を除けば、B図と②図とはその絵図仕立てに類似性が高い。そうしたことから、城下町の新設・増設にあたって幕府は、正保城絵図に近い仕立て様式をもつ御普請絵図を普請完了時に幕用図として提出させていた可能性があるのではないだろうか。現在のところ、他の城下町についてこのような御普請絵図を確認することはできないが、矢守は数多い正保城絵図の中には様々なバリエーションの城絵図あることを紹介している<sup>66)</sup>。その中には、町名や町屋の屋敷割まで描かれ、矢守が正保城絵図の下書きと考えるような絵図も含まれており、こうした絵図についても、上記の視点から改めて再検討する必要があるのかもしれない。

なお、本稿では「須本御城下町屋敷之図」と「須本御山下之絵図」の分析から洲本城下町成立のプロセスをみてきたが、今後は両図ならびにその後に作成された各種の洲本城下絵図と比較分析することで、徳島藩政下における稲田家ならびにその家臣団の位置づけも含め、洲本城下町の支配体制や展開過程が明らかにできるものと思われる。他方、徳島城下町の場合には、寛永15年の阿波九城の破却により城番制が解体し、家臣団の徳島城下への集住策のもと、翌16年以降に佐古・富田地区に足軽町や町屋地区が増設されて城下縄張りには大幅に拡大した<sup>67)</sup>。その点で、「由良引



け」や洲本城下町建設は、徳島城下町の再編や徳島藩における藩政改革の試金石をなすものであり、その意味でも、両城下における城下絵図の分析を通じて、阿波・淡路両国支配の実像の一端に迫ることも必要と考える。今後の課題としたい。

(徳島大学総合科学部)

#### 〔付記〕

本稿の作成にあたっては国文学研究資料館、洲本市教育委員会の浦上雅史氏、元・洲本市立淡路文化史料館の深田英夫氏、徳島市立德島城博物館の根津寿夫氏には大変お世話になった。記して深謝申し上げます。本稿は、科学研究費基盤研究(B)「GISを用いた城下町に関する歴史情報システムの構築と解析」(研究代表者 平井松午、研究課題番号17320135)の成果の一部であり、2007年9月9日開催の一六一七会洲本例会(洲本市立淡路文化史料館)において「城下絵図からみた近世洲本城下町の成立」、ならびに2008年5月18日の第51回歴史地理学会大会(宮城大学)において「徳島藩政下における洲本城下町成立の町割計画図」と題して報告した。

#### 〔注〕

- 1) 代表的研究に、①松本豊寿『城下町の歴史地理学的研究 増補版』、吉川弘文館、1967。②矢守一彦『都市プランの研究—変容系列と空間構成—』、大明堂、1970。③矢守一彦『都市図の歴史 日本編』、講談社、1974。
- 2) ①後藤雄二「城下町仙台の拡大に伴う侍町の変化」、東北地理29-3、1977、146~153頁。②後藤雄二「17世紀の城下町仙台における侍の居住パターン」、地理学評論54-9、1981、513~529頁。③渡辺理絵「米沢城下町における拝領屋敷の移動—承応・元禄・享保の城下絵図の分析を通して—」、歴史地理学42-4、2000、23~42頁、など。
- 3) 例えば、高橋康夫ほか編『図集 日本都市史』、東京大学出版会、1993。
- 4) 小川都弘・小林至広・久武哲也「絵図分析の枠組」(葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー 上巻』、地人書房、1988)、11~47頁。
- 5) 渡辺理絵『近世武家地の住民と屋敷管理』、大阪大学出版会、2008年、12~15頁および190頁。
- 6) 前掲1) ③84頁。
- 7) 鳥取県立博物館編『鳥取県立博物館所蔵 鳥取城絵図集』、同館、1998年。
- 8) ①歴史地理学会島根大会実行委員会図録編集委員会・島根県立博物館編『三館合同企画「絵図でたどる 島根の歴史」』、島根県立博物館、2004。②島根大学附属図書館編『絵図の世界—出雲国・隠岐国・桑原文庫の絵図—』、ワン・ライン、2006。
- 9) ①高重 進「94 岡山城下絵図」(中村拓監修『日本古地図大成 解説』、講談社、1972)、83頁。②谷口澄夫「岡山 岡山絵図」(原田伴彦・西川幸治編『日本の市街古図【西日本編】解説』、鹿島研究所出版会、1972)、44~47頁。
- 10) 草薙金四郎「高松 高松市街古図」(前掲9) ②、61~64頁。
- 11) 福岡 博「佐賀 佐賀御城下絵図」(前掲9) ②、78~81頁。
- 12) ただし、正保以前の作成とされる城下絵図の中にも作成時期が疑問視されるケースもある。矢野司郎「近世大和郡山城下町絵図覚え書き」(関西大学文学部地理学教室編『地理学の諸相—「実証」の地平—』、大明堂、1988)、148~169頁。
- 13) 三浦正幸「城絵図とは 種類と目的」(『歴史群像シリーズ よみがえる日本の城26 城絵図を読む』、学研、2006)、2~4頁。
- 14) 平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系第29 I 兵庫県の地名』、平凡社、1999、1118頁。
- 15) 築城時期については、永正7年(1510)とする説と大永6年(1526)説とがある。洲本市史編さん委員会編『洲本市史』、洲本市、1974、69頁。
- 16) 洲本市立淡路文化史料館編『おいでではいりょ見てはいりょ 城下町洲本』、同館、1988、17頁。彩色図。
- 17) 藤井容信『味地草』(地誌書)所載、文政8

- 年(1825)、洲本市立淡路文化史料館蔵。
- 18) 国文学研究資料館蔵蜂須賀家文書、資料番号1220。手書き彩色図(90×123cm)。
  - 19) 谷本 進「洲本城の構造と形態」(角田誠・谷本進編『淡路洲本城』、城郭談話会、1995)、15～38頁。
  - 20) 松岡利郎「洲本城および城下町の建築」(前掲19)、85～118頁。
  - 21) 西尾孝昌「洲本城と城下町に関する一考察」(前掲19)、39～58頁。
  - 22) 「淡路国洲本之御城絵画」(筆者未確認)では、稲田家家屋敷地であるはずの三熊山山下北麓部分が「平地」と区分されている点は注目される。前掲1) ①224～236頁。なお、松本が「淡路国洲本之御城絵画」とする絵図は、「淡路国須本之御城絵図」(国文学研究資料館所蔵蜂須賀家文書、資料番号1217-2)である可能性が高く、同図には松本が「古ヤシキ」群とする曲輪群を三熊山山腹の登り石垣付近に確認できる。
  - 23) 脇坂氏が、洲本移封前は戦国期型城下町の代表例である高取城主であったことを斟酌すると、このような城屋敷の配置は十分に想定される。
  - 24) 本田は、「由良引け」を計画していた蜂須賀氏が、検討資料として作成したものかと推測している。本田昇「洲本城の遺構調査から」(前掲19)14頁。
  - 25) なお、三好は「天文年中淡路諏本町並図」に依拠して、安宅氏時代には水軍根拠地として小規模な城下町が形成されていたであろうこと、仙石氏・脇坂氏支配の約27年間にわたって洲本の都市景観は整備されたとみられるが、池田氏の由良成山城建造・由良集住に伴い洲本が衰退したため、「由良引け」は洲本城下町の復旧事業としての意味合いも持っていたとしている。三好昭一郎『近世地方都市成立史の研究』、私家版、2006、141頁。
  - 26) 正保国絵図(国文学研究資料館所蔵蜂須賀家文書、資料番号1196-3)では石高460石余。津田村は物部組に属し、洲本城下の外町地区および三熊山・曲田山一帯を含む村域が広範囲に及ぶ藩政村であるが、元禄以降、外町地区は津田村の支配を離れたとされる。前掲14) 1125頁。
  - 27) 前掲15) 104～105頁。なお、「稲田家成立書」によれば、稲田示植は元和元年に藩主蜂須賀至鎮より「淡州由良浦城代」を仰せ付けられ、翌2年に「彼地へ罷越」、同7年に「由良浦より脇城え罷候」とある。中山義純輯・牛田義文訳注『訳注 阿淡藩翰譜<一>』、私家版、2001、98～99頁。
  - 28) 前掲15) 106頁。
  - 29) 前掲15) 112頁(原史料は「淡州御城之義二付御老中ノ書状」、国文学研究資料館所蔵蜂須賀家文書、資料番号1104)。
  - 30) 前掲15) 107頁(原史料は前掲29))。
  - 31) 前掲15) 107～116頁。「由良引け」に関する幕府との協議の中では、「阿波、淡路の両国の絵図と隣国の方角まで委しく書いたもの」とあって、由良と洲本の地理的位置関係についても検討されている。
  - 32) 前掲25) 137頁。
  - 33) 徳島県史編さん委員会編『徳島県史料 第一巻』徳島県、1964、86～93頁。
  - 34) 『阿淡年表秘録』によると、由良城番となる森甚太夫に「嶋原平均後由良成山御城破却被仰付諸士御国又ハ須本へ引越被仰付甚太夫一人…(中略)…成山御城跡へ引越」が命ぜられている。
  - 35) 前掲15) 128頁。
  - 36) 前掲25) 139頁および447～453頁。
  - 37) 蜂須賀家では、天正13年(1585)の阿波国入部以来、徳島城(本城)のほかに阿波国内に「阿波九城」と称する支城を置き、家老クラスの上級家臣が300～500名の家来とともに支城を警備する「城番」制をしき、加増された阿波国支配に際しても当初こうした城番制が採用された。
  - 38) 前掲25) 157頁。
  - 39) 前掲15) 132～133頁。
  - 40) 国文学研究資料館所蔵蜂須賀家文書、資料番号1230-1。手書き彩色図(84×112cm)。
  - 41) 国文学研究資料館所蔵蜂須賀家文書、資料番号1217-3。手書き彩色図(184×233cm)。
  - 42) 図7(トレース図)の作成にあたっては、銀札場・新御蔵・会所・籠屋(牢屋)・町奉

行所・鍛冶蔵・作事方役所などの徳島藩の施設を「藩施設」、藩士名のみ記載された屋敷地を「藩士屋敷」、手代屋敷・同心屋敷・御掃除坊主など役職名のみ表記された屋敷を「卒屋敷」、御鉄砲之者を「足軽組屋敷」、御水主を「水軍屋敷」、稲田家来の惣屋敷・惣長屋・奉公人長屋・船屋・射場などを「稲田家施設」、氏名の右肩に「稲田九郎兵衛家来」「同」と書かれた侍屋敷を「稲田家来屋敷」、稲田家来御鉄砲之者を「稲田家足軽組屋敷」とした。

- 43) 宮本武史『徳島藩士譜 上・中・下巻』、徳島藩士譜刊行会、1972・73。
- 44) なお、松本豊寿は洲本城下町について、他の小規模城下町と同様に、領主居館と侍屋敷を分界する境界線が明確ではなく、「城郭」(山城) - 「領主居館+侍屋敷」 - 「町屋」の形態をとるとしている。前掲1) ①216頁。
- 45) 稲田家家臣屋敷については、他の洲本城下絵図では稲田家「下屋敷」として扱われる場合もある。正保城絵図などの幕用図では、こうした下屋敷も侍屋敷として一括区分されている。
- 46) 前掲25) 144頁。なお、稲田修理亮示植は寛永9年に徳島城下の寺島地区に居第(屋敷地)を拝領し、同11年5月の由良城破却に際して岩屋浦固め(警備)についた後、同12年正月に洲本城に移ったとされる。前掲27) 72~73頁。
- 47) 平井松午「徳島城下の土地利用」、平井松午・根津寿夫編『徳島城博物館絵図図録 第二集 徳島城下とその周辺』、徳島城博物館、2001、52~55頁。
- 48) 武田清市『近世淡路史考』、近代文藝社、1988、77頁。
- 49) 1630~40年代(推定)の淡路国を描いた屏風仕立ての鳥瞰図「淡路国大絵図」(個人蔵)では、洲本城下の内町(須本)・外町とも建物でおおむね充填されており、城下町はほぼ完成している。瓦葺きの御屋敷前に広がる中老級の徳島藩士屋敷は、街区単位で屋敷地を土塀(築地塀)が取り囲んでいるが、屋根は瓦葺きではなく、その多くが檜皮葺もしくは板葺きとみられる。町屋家屋は表口が道路に面しており、その内部は畠か空き地となっている。下級藩士屋敷には土塀はなく、足軽組屋敷の一部には茅葺き屋根もみえる。御城内と稲田家臣屋敷の多くは雲形で隠れていて、外町の西側には城下町を覆い隠すように竹林が南北方向に延びている。吉野川文化探訪フェスティバル(吉野川下流域)企画委員会・徳島城博物館編『秀吉の町・家康の町一川と人の織りなす歴史・文化一』、第二十二回国民文化祭徳島市実行委員会、2007、64頁および86頁。
- 50) 国文学研究資料館所蔵蜂須賀家文書、資料番号1217-4。手書き彩色図(187×181cm)。本図については、松岡も「町割寸法や内容からみて計画図のように思われる」と指摘しているが、とくに分析はなされていない。前掲19)。
- 51) 国文学研究資料館所蔵蜂須賀家文書、資料番号1229-1。手書き彩色図(228×224cm)。
- 52) 寛永10年の西国巡見使の来国時に作成されたとみられる淡路国絵図「阿波淡路両国絵図(淡路国)」(国文学研究資料館所蔵蜂須賀家文書、資料番号1197-1)では、洲本城(上ノ城)を「城」、由良成山城を「古城」と表記しているものの、城下町洲本については小判型の村形記号で「須本村」と表記されていることから、寛永10年段階ではまだ城下町として成立していない様子が伺える。平井松午「阿波の古地図を読む」(徳島建設文化研究会編『阿波の絵図』、同会、1994)、89~106頁。
- 53) 前掲1) ③85~86頁。
- 54) 矢倉台の付紙は、内町の北西隅にも貼付されているほか、内郭の東北隅および外郭の東側にも「矢倉台」の書き込みがある。
- 55) なお、本図では三熊山山下に「此赤筋水道」とあって、城郭外堀につながる水道を物部川から引き込んでくる計画も図示されている。
- 56) 国文学研究資料館所蔵蜂須賀家文書、資料番号1217-2。手書き彩色図(169×160cm)。
- 57) 承応2年(1653)の3代藩主「蜂須賀光隆

定書」(国文学研究資料館所蔵蜂須賀家文書, 資料番号255「御普請奉行元居書抜」所収)では, 新たに屋敷を与える場合には, 知行高500~200石の藩士で表口25~20間, 裏行30~20間, 坪数750~400坪, 同じく知行高150~100石の藩士および無足士で表口19間, 裏行20間, 坪数380坪と基準が定められた。これにともない, 下屋敷の所有は知行高1,000石以上の上級藩士に限定された。なお, 徳島城下にも3,711坪の屋敷地を拝領していた知行高約14,350石の稲田家は別格として, 今田六郎左衛門も稲田采女も当時は500石取の高取士分(中老級)であり, 新規の拝領屋敷よりは多少広めの屋敷地が与えられていたことになる。前掲47) 56頁。

- 58) 10ヶ寺のうち, 専称寺は延宝元年(1673), 称名寺は貞享年間(1684~88)に寺町へ移転してきたとされることから, 寺町の整備は由良引け後も継続的に実施されていたとみられる。前掲14), 1123頁。
- 59) 外町内の「築屋敷丁」や「マコモ(真菰)丁」は, もともと沼地であったとされる。
- 60) もっとも, 本図が計画図であれば, 完成予

想図として未完成の水堀を描く場合も想定はされる。

- 61) 前掲14) 1122頁。
- 62) 彦根城下町について矢守は, 慶長8年(1603)に城郭築造に着手して最初に鐘ノ丸が完成し, その年から本町の町割が開始され, 同11年に本丸・天守閣が完成, 足軽中敷屋敷も設置されたとする。矢守一彦『城下町』学生社, 1972, 70~71頁。
- 63) 前掲15) 132~133頁。
- 64) 寛永11年の「由良御城破却」も由良成山城を指すとみられるが, 阿波九城と同様に, その段階ではまだ石垣などは残されていた可能性があり, 寛永15年の廃城に際しては石垣もすべて撤去したものと考えられる。前掲33), 102頁
- 65) ①前掲1) ③92頁。②千田嘉博編『図説正保城絵図』(別冊 歴史読本76), 新人物往来社, 2001。
- 66) 前掲1) ③92~95頁。
- 67) 平井松午・根津寿夫編『徳島城下絵図 図録』, 徳島城博物館, 2000, 42~43頁および55~56頁。